

インテリアワークショップ「折りを使ったランプシェード」

毛利 洋子

The interior workshop "Lamp shade using pleats"

Yoko MOHRI

Abstract

This paper reports implementation of the interior workshop "Lamp shade using pleats". This records background of participation, the process until the implementation and the state of the workshop. This report has the angle of the architecture and interior design education. A teacher proposed a subject at this interior workshop, students put this interior workshop into effect.

(Key words: インテリアinterior, 折りpleat, ワークショップworkshop)

1. はじめに

活水女子大学健康生活学部生活デザイン学科では、2018年度よりカリキュラムを新しくし、建築・インテリア、情報分野を強化し、現在2年が経過しようとしている。カリキュラム改定に先立ち、改定前の2017年度から、建築・インテリア分野、情報分野の各専門教員も年々充実させてきた。

新しいカリキュラムをスタートして2年目の2019年10月、生活デザイン学科では、長崎県と長崎県ゆりのある住まいづくり推進協議会が主催するイベントに出展し、子供向けインテリアワークショップを開催した。本稿では、この取り組みを報告する。このイベントは、「2019まちづくり総合住宅フェア」（以降住宅フェア）であり、建築にたずさわる地元企業と地元大学で建築を学ぶ学生の出展により実施されている。このイベントは、そもそも、国民の住宅に関する意識向上や、豊かな住生活の実現などを図るため、国が毎年10月を「住生活月間」と定めている¹⁾ことに起因しており、これに伴い、長崎県は平成3年から住宅フェアを実施している。2018年度の来場者は約2000名である²⁾。長崎県から本学総合企画室へ参加の打診があり、2019年度に、初めて参加することとした。

本稿は、開催時の様子のみならず、ワークショップ実施に至る過程等も含めて整理し、報告する。このイベントへの参加、出展は、本来、学生主体のものであるが、初回の取り組みとなった今年は、ワークショップの題材を教員から提案し、学生は実働に取り組んだ。

2. イベント概要

住宅フェアは、2019年、10月5日（土）、6日（日）に実施された（表1）。場所は長崎県庁舎である。長崎県庁舎新築・移転に伴い2019年1月から業務を開始しており、1階ロビーは、吹き抜けがある大空間となっている（図1、2）。屋内において各エリアを出展者ごとに割り当てたイベントが開催可能である。また、ロビーに隣接する屋外には一部屋根がある屋外空間があり、舗装された床面からランドスケープの芝へスムーズにつながる。そのため、屋内外を一同に活用したイベントも実施可能となっている。また、同時開催で、10月5日には、「地域を元気にする空き家リノベ

フォーラム」が開催された。

主催は、長崎県と長崎県ゆりのある住まいづくり推進協議会であり、共催に国土交通省、特別参加として長崎県地域材供給倍増協議会となっている¹⁾。また住宅フェアの内容は、実施年度の長崎県のHP掲載の広報資料によると、県庁舎の環境対策設備を見て回るとされるエコ探検や、県庁舎を活用したガラスお絵かき、お仕事体験など、子供向けのイベントやワークショップが開催されている^{3, 4)}。本学科の出展も、子供向けのお仕事体験の一つとして出展を求められていた。大学生の出展に対しては、建設業界への人材育成の意図もあり、出展者でありながら、県内企業を知る機会としても活用してほしいという意向が、長崎県からの説明でも示されており、また、建築を学ぶ場を広く伝えるという視点からか、大学のPR等も実施してかまわないという状況であった。

表1 住宅フェア開催日時

開催日	開催時間	備考
2019年10月5日（土曜日）	10時30分から16時	
2019年10月6日（日曜日）	9時30分から15時30分	翌日は地域行事「おくんち」



図1 開始前打ち合わせる学生

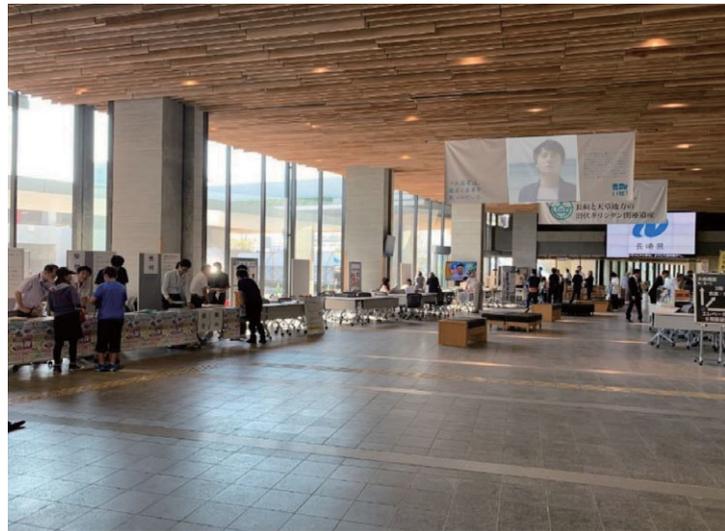


図2 開催場所の様子（開場前，設営後）

3. ワークショップに至る過程

このワークショップへの参加のきっかけは、先に述べたように、長崎県土木部住宅課からの打診による。一方、本学科においては、2017、2018年度に建築・インテリア分野を中心に担当する教員が着任しており、2019年には卒業研究や専門セミナーといったゼミにおいて、その分野を希望する学生が集まり、少人数教育ができる環境が整ったところであった。それゆえに、3、4年生で興味をもつ学生が、このイベントに取り組むことができれば、学外におけるワークショップ等にも対応可能であると判断することができた。建築・インテリア分野に興味を持っているゼミ学生に参加の意向を聞くと、やってみいたいという意思が確認でき、まずは4年生1名に、マネジメントを中心に取り組んでもらうこととした。

イベント開催迄は、長崎県の担当者により、会議が数回行われた。初めて参加するにあたり、長崎県による具体的な説明を踏まえたため、初回の会議参加には間に合わなかったが、学生主体のイベントであるため、地元企業の出展者の担当とともに学生に会議にも参加してもらうこととなった。この会議の場で、その年のテーマ、設営、会場の配置等の改善や段取りが話し合われている。2019年度は、令和元年でありテーマは「新たな時代の住まいづくり」であった。また、試作材料や製作

の為の道具、当日の材料等に対して、予算が支給され、その予算管理に関しても学生が行うこととなり、領収書や収支報告書の作成・提出が求められた。

初年度であり、建築・インテリアを担当する教員でワークショップの題材を詰めることとした。一方で、大学での授業であるインテリアデザインの演習課題の一つで、「ランプシェードのデザイン」に取り組んでおり、ランプシェードの提案については、授業の一環として取り組んだ経験があった。その際、一つのデザインのきっかけとして、折りを使った作品を紹介した。建築の外観、内装に用いられた折りの形状の事例から、ランプシェード等のインテリア要素、プロダクト、ファッションに及ぶ事例で、生活デザイン学科の専門領域と、その対象に該当するものを紹介した。また、授業での演習時に、折りの手法を用いて、スタディすることにも取り組んでいたことから(図3、4)、ワークショップの題材として、折りを使ったランプシェードの提案に至っている。利用した材料は、建築図面を手描きで製図する等に一般的に用いられるトレーシングペーパーである。用途は違うが、半透明の用紙であることと、硬さと柔らかさのバランスにより、折り目がはっきりである用紙である為、採用した。さらに、このトレーシングペーパーを用いた折り紙で作るランプシェードで、小学生向けの工作講座を開催した経験もあり、今回の出展に関しても、対応可能なのではないか、という感覚があった。



図3 授業で取り組んだ折りのスタディ



図4 携帯ライトを用いた様子

以上のような経緯から、「折りを使ったランプシェード」の方向性を決め、いくつかの試作や参考事例を集めた(図5、6)。そのうち、折りの形態を1種に限定することとした(図7)。電球については、学生の意向を優先し、マネジメントを依頼した学生1名が、商品選択、購入の手配を担当した。その結果、ランプの色、色の変化の有無等に差をつけることとし、ワークショップの題材が確定した。

次に、ワークショップ当日に、主に子供たちに対してワークショップを実施するための準備が必要であった。ワークショップ当日は、学生が実施することとなる。学生の人数も必要となることから、3、4年生のゼミ学生で対応することとし3年生10名、4年生1名で実施することとなった。イベント当日、担当する学生の時間配分等について、マネジメントを依頼した1名の学生が取り組み、実施日のスケジュールを組んだ。

イベント実施直前に、事前練習を実施し、折りによるランプシェードの製作を学生に習得してもらった。その際の説明資料が製作手順(図8)である。折りの方法は、書籍「<折り>の設計 ファッション、建築、デザインのためのプリーツテクニック」⁶⁾を参考にし、製作手順の資料を作成した(図8)。単に、折り方だけがわかっていても、折り目のある紙から、凸凹が生じた立体に仕上げることに難しさがああり、そのテクニックとなる部分を加筆し、製作手順の資料を作成している。事前

とがあった。また、当日受付での参加もあり、子供以外でも、このイベントに出展している他出展者の参加者で、建設業に携わる人の参加もあった。事前予約の方に支障が無い様に、当日受付に対応するものの、人が多かった為、時間をずらしてきたという事前予約の方もあり、反省点である。

一人当たりの時間が30-40分程度であったが、製作にかかる時間には個人差が開く様子があった。学生は、正面で向かい合って説明をしたが、ほとんどが、学生自身も一つ一つ折り方を示しながら教えていた(図10)。また、個々の差に伴って、参加者の製作過程で、学生が、時折、子供の折りを支えたり、折り目を強く補強したりしながらの対応が見られた。ものづくりワークショップである今回の題材の場合、あまり口頭での説明が要らない様に見受けられた。作成手順も用意したが、対面での実演により説明ができていた。中には留学生の学生もいたが、当初は不安な様子であったが、対応できていた。

光源に関しては、2種類の自立型の照明を準備した。電池でLEDが点滅する。蠟燭型で、炎のように光源がゆらめくLED電球と、揺らめきはないがスムーズに色の変化が生じるLED電球の2種である。色に変化するLED電球の方が圧倒的に人気であった。

教員が様子を見ていた間だけでも、参加する子供の隣で保護者や、様子を見に来た大人からのコメントも聞こえてくる。停電時に活用できるから良いという話や、自分で作りたいのだから、この用紙の材料は何だろうか等、学生に問い合わせている様子が見られた。



図9 ワークショップの様子



図10 教える学生と参加者の手元の様子

5. おわりに

活水女子大学で建築を学べることを、意外に思われることも多いことから、イベントへの参加を試みた。しかし、実際に出展が可能となったのは、新しいカリキュラムが進行しつつあり、教員が充実しつつあることと、旧カリキュラムの学生ではあるが、興味を持った学生が集まる小人数教育の場があったことがある。

また、参加の意思を示した学生の存在が実施に至る原動力でもあり、大きな動力となっている。学生でありながら、地元企業や長崎県職員等の社会人と会議の場や、連絡のやり取りも行い、当日の実施をマネジメントできたことは、学生本人の言葉からは、充実した達成感を得たように感じられた。3年生で当日のイベント実施に携わった学生らは、実施前には、不安な様子もうかがえた。初回でもあり、教員も当日の様子を見に行ったが、少し慣れると学生らで十分に対応できていた。

予定していたように、学生にとっても地元企業や、建築の実務や、業種に接する機会になっていた。ワークショップの参加者として製作しながら、建設業に携わる人と話ができた学生もいた。就職活動を控えた3年生と、これから社会に出ていく4年生の組み合わせでの参加は、丁度良かったように感じられる。

ワークショップの題材に関しては、小学生がつくる工作としては、難易度が高いことが心配されたが、大学生のサポートによって個々に作品を仕上げ、持ち帰ってもらうことができた。時折、時間がかかりすぎる為に、こどもの集中力も切れ、学生が、参加者が作成したものを預かり、手を加えることがあったが、ほとんどは製作時に学生がサポートしながらの対応で完成させていた。学生が事前に各自で習得し、準備できていたことも大きな要因だと考える。

今回、使用した材料（用紙）は、一般的にはなじみのない材料である。参加者にはわずかではあるが、建築にまつわるものに触れる機会になったのではないだろうか。また、次回にむけて、今回既に3Dペンによる立体の作成も、一部で取り入れてみた。

題材とした折りの形により、フラットである紙が、折りと曲げによって、立体になる体験を提供した。造形的な魅力を感じてもらう機会になったことを期待する。また、光があたることによって、立体的な形の印象も変化する。さらに、参加者が自宅に持ち帰り、室内空間において、活用することを想像し、小さなインテリア要素が、部屋全体の印象を変えることがある、という魅力の体験にもつながることを期待する。

【参考文献】

- 1) 長崎県HP, 2019まちづくり総合住宅フェアの開催について,
<https://www.pref.nagasaki.jp/press-contents/408701/> 2020.01.31閲覧.
- 2) 長崎県説明資料, 「2018まちづくり総合住宅フェアの開催結果について」
- 3) 長崎県HP, 2019まちづくり総合住宅フェアの開催について, 7.ポスター,
<https://www.pref.nagasaki.jp/shared/uploads/2019/10/1569922574.pdf> 2020.01.31閲覧.
- 4) 主催者配布資料, お仕事体験.
- 5) 編集発行人 千代延勝利, 2010, 大人の科学マガジンVol.29, AKARI折り紙, p 76-77, 学研.
- 6) ポール・ジャクソン著, 牧尾晴喜訳, 2018,
「<折り>の設計 ファッション、建築、デザインのためのプリーツテクニック」,
ピー・エヌ・エヌ新社.